

ワールドマスターズゲームズ柔道で金メダル

熊高四五会の皆様お元気ですか？ 二〇二五年五月に台湾でワールドマスターズゲームズが開催され、私は五月二十二日に台北で開催された柔道部門、M9（七十歳以上）、66kg級に出場し優勝しましたので報告いたします。



ワールドマスターズゲームズは、四年ごとに開催される世界最大規模の国際総合スポーツ大会で様々な競技があります。おおむね三〇歳以上であれば誰でも参加することができ、「生涯スポーツ」の祭典です。東京オリンピック二〇二〇年の翌年の二〇二一年に関西で開催される予定で私もエントリーしていたのですが、COVID-19の流行で二〇二七年に延期されましたので、それまで待って台湾に行きました。台北には、いつも同行して世話やビデオ・写真撮影してくれる妻を伴いました（五年前に再婚しました。熊高の後輩です）。

日本からの参加は十数名と少ない参加でしたが、熊本から三名参加があり、うち二名は昨年のラスベガス世界ベテランズ大会で仲良くなった方々で、旧交を暖めました。今回のテーマは、「Sports beyond age. Life without limits」で、台北では市をあげて多くのボランティアがお世話をしており、いたるところで温かい歓迎を受けました。試合前日に計量をすませ練習場で軽くトレーニングを行い体調を整えました。日頃から私の練習法は、相手と組まなくても一人でトレーニングや形（かた）、打ち込み（木や壁、電柱に向かって技のくり返し練習）を行いますので、台北でも練習場や近くの公園でマイペースに練習ができました。

M9、66kg級の出場者は四名でしたので、総当たりの戦いとなりました。内訳は日本人二名と地元台湾の選手一名、モンゴルの選手一名でした。一回戦は日本人のF選手、試合前に挨拶しましたが、大変面白い方で、蝶々を集めるのが趣味で台湾の山にもたくさん珍しい蝶々がいるの



で、柔道のついでに前日山に行き、試合後も行くと言われ楽しみに来られていました。試合開始後早々にF選手得意の横捨て身技を掛けられました。すいとも相手の出した足をすり抜けて頭側に移動し、そのまま抑込みに入り一本勝ちでした。第二試合は台湾の選手でした。試合開始早々に小内刈りで倒し有効を取り、さらに大内刈から払腰の連続技で一本を取りました（写真1）。いずれにせよ、いつも一人で入るタイミング、形を練習していたので、自分でも見事に決まった、と思います。

最後は事実上の決勝戦をモンゴルの選手と戦いました。この選手とは実は昨年のラスベガスでの世界ベテランズ大会の一回戦で当たり、組んだ早々に小内刈りで一本勝ちした選手でした。今回は裏投げのような返し技を相対練習したようでした。実際に組んで早々に得意の左小内刈りを掛けましたが、今回はかかわず残されました。しかし、動きながら相手の隙を見て、再度小内刈りを掛けたところ、今度は一本決まりました。これで三戦全勝。三戦とも一分以内の一本勝ちでした。メダル授与式では、参加者全員が表彰台に上りました（写真2）。金メダルはサボリしてくれた妻のお陰と思っています。



終了後は熊本から来ていた三名の熊本の先生方と一緒に中華料理を食べながら懇親を深めました。熊本人が多かったため、安心して熊本弁を使いました。翌日は台湾観光、阿里山にロープウェイで上り有名なお茶を飲み、故宮博物館も訪れました。何故、この年になっても柔道をやるのか？ 仕事柄脳卒中後の後遺症に対するリハビリテーションや高齢者のフレイル（虚弱）や認知症対策に取り組んでおり、やはり大事なことは運動だと感じ、また退官した人にも運動を勧めているので、大学教授を退官後に自ら運動しようと思い、筋トレやジョギング、少年たちへの柔道指導を始めました。熊本高校や熊本大学時代に文武両道を実践し、少ない練習時間を補うために、一人で木に向かって行っていた打ち込み練習などが、今になって生きています。運動と脳の関係では、有酸素運動や筋トレにより、筋肉から脳の栄養因子が出て脳細胞を再生するとも言われています。

今度は十一月のパリ世界ベテランズ柔道選手権にエントリーしています。命と心技体が続く稽古、医師の仕事と柔道ができればいいなと思います。熊古に励んでいるこの頃です。皆さんも少しでも運動をしましょう。

二〇二五年十一月三日からパリで行われた世界ベテランズ柔道選手権にM9、66kg級の出場しました。一回戦を勝利し準決勝で昨年優勝のモンゴリアール五輪五位のポルトガルゴメス選手と戦い、ゴメス選手の僅差判定で敗れました。銅メダル戦では開始早々燕返しが決まりメダルを獲得しました。昨年と上位三名は同じメンバーでした。ビデオをYouTubeにアップしたので、ご覧下さい。アードレスは別記！（七室 永廣 信治）

広島へ移り住んでもう五十年！

九州から広島へ移り住んでもう五十年が経ちました。時が過ぎるのは早いものです。昨年度のノーベル平和賞に日本被団協が選ばれました。今年は被爆八十年というところで、記憶の継承という大きな課題に広島市民一人一人が取り組むことが求められています。

熊高四五会にはたぶん広島在住の方はおられないと思いますので、広島市原爆について紹介させていただきます。以下は、私が定年まで勤めたマツダを退職後に働いていた島根県広島事務所時代に、事務所のメルマガジン（島根県職員やメルマガ登録者対象）に、原爆の日の直前に寄稿したものです。

またあの八月六日がやってきます。広島事務所の前、電車通りを西へ十分ほど歩くと平和記念公園に着きます。緑豊かな公園になっていますから、こんな人はいない公園の上に原爆が落ちてよかったね、と勘違いされる外国人もいるかもしれません。



ここ中島地区は広島一の繁華街で四千人以上が暮らしていたと言われています。週初めの月曜の快晴の朝八時十五分に、一瞬のうちに何もかもなくなりました。

現在、平和公園の中で原子爆弾投下前からのものは四つです。原爆ドーム、レストハウス、相生橋碑、そして慈仙寺の墓石です。

投下後の廃墟のなかで遺骨の収集が行われましたが、ある程度進んだところで、中島地区全体に市内のがれきが約50cmの厚さに敷き詰められ、さらにその上に、15～40cmの盛土が施されました。慈仙寺の墓石は、墓石のあるところだけが一段低くなっています。まさにそこが、当時人々が生活していた場所。原爆に焼かれた地面です。ぜひ一度は、ここを訪れ、予告もなく一瞬で生を絶たれた人々を想い、戦争のない平和への思いを新たにしたいものです。慈仙寺の墓石は原爆の子の像の西、約百メートルのところにあります。（十一室 原田 弘）

一番とは言えないが、人生で苦しかった時期

私は、本高校を卒業後、一浪して鹿児島大学に入学し、卒業した昭和五十年四月に当時の電電公社に入社した。幾つかの土地を転動した後、本社に戻り、昭和五十九年三月に鹿児島県を統括する鹿児島電気通信部の中間管理職として赴任することとなった。妻と小学校在学に入り学となった長女の三人で、市内の下荒田にあった社宅で南国鹿児島県の生活を満喫することになった。昭和六十年に入社して、妻の妊娠が分かり、東京生まれの妻は初めての土地で知り合いも無く、大きな不安を感じていたのであった。そのような中、同年九月に、私は故郷である熊本に転勤になった。なお、電電公社はその年の四月に民営化されN.T.T.になっていた。名称だけがかわって、今度は鹿児島支社から九州総支社への転勤であった。ここで、困ったことが生じた。妊娠中の妻は熊本への移動が困難であり、そのまま小学校一年の長女と二人で鹿児島島の社宅に残ることとなった。熊本市内の実家（帯山）には、高齢の両親が住んでおり、しばらくの間、熊本に居る時は、実家で暮らすこととなった。つまり、昭和六十年の九月から、鹿児島と熊本を往復する生活がスタートしたのである。往復の手段は、前年に鹿児島市内で購入した中古の小型車（三〇〇cc）に頼ることとした。

熊本の九州総支社で月曜日から金曜日まで仕事をした私は、直ぐに市内の実家に帰り、鹿児島へ行く準備を済ませると、玄関前で両親に見送られて鹿児島へ出発することになった。九州自動車道の熊本インターチェンジで高速道路に入り、終点の八代で降りる。それより南はまだ工事中であった。国道三号線に入ってひたすら南下し、



水俣市内の北部に到着。そこから国道三号線と別れて、鹿児島県大分方面に向かう国道二六八号線に入。途中「長野」という集落を通るが、全く記憶に無いもの、ここが私の生まれた土地だということも三十数年後に自分の生まれた土地を通るといっても何かも感じないものである。水俣から東へ向かって長い坂道を登って行くが、人家も無くなり街灯も設置されていない漆黒の闇の中を車のヘッドライトのみを頼りに進むのである。